慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（三）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.437(125)- 462(150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相互組合創設の如き悉く彼れの熱心に主張せる所なるも、そは偏に各個人の自覺を促し自立を強むるに明確適切なる積極的效果有りと信ずる故である。そは常に個人の道義的觀念を助成し峭育する從屬的地位に置かれてゐる。個人は究極の變更し難き單位であつて、其利害關係のみが總ての社會改革の唯一の支點である。又實際個人が一般に善良であるならば、如何に劣惡なる制度も何日かは彼等の善良性に適合する樣に自然に改革せらるゝものである。然るに反對に個人性を以て社會の作り出すものと看做し、是に責任を轉嫁せんと欲する如きは自然の秩序に逆抗するものものと云ふのである。

斯くして彼は政治哲學に關するゴドキンの「形而上學的研究方法」を排除し、科學的研究方法を以て是に代位せしめしものである。即ち總ての政府は外部より一種神秘的に侵入し來りて、何に故にか自然の秩序に由々しき不調和を導けるものとの觀念を退け、彼は事實如何、法は如何にして發展せる乎。又其理由如何を研究したのである。而して是に對する彼れの解答を約言すれば、現存の法規秩序及び不平等は、若し是れ無くんば人類を絶望的貧困と鉛沈の狀態に陷らしむる傾向を制限するに、絶對的に必要であつたと云ふに歸着する」(Stephen: The English Utilitarians. vol. II p. 175)。

以上の所言に徵して明瞭なるが如く、彼は「安定」と「平等」とを兼備し得る時は幸甚なれども、若し兩者を併有する事の絶對に不可能なる場合には、前者を採擇し後者を抛棄するが功利の原理に妥ふ所以と思惟せる點に於て、ベンタムと其見解を等しうするものである。蓋し古典派經濟學徒の通有性は、所有の安定が產業の自由發達を增進せしむる第一要件たる事に確乎たる信念を有し、それが他方に於て、特に所有が獨占の形態に近付くに從つて、資本家側に於る自由競爭を阻止し勞働者側に於る勞働の機會を不安固ならしむる事の爲に、產業の完全なる發達に對し障碍たるに至る可き事を透見し得ざりし點に在る。其原因は恐らく彼等の時代に於ては未だ產業革命の初期のみを見たる結果、特權の排除、自治權の獲得、貿易及び出版の自由の公認等凡ゆる消極的自由を獲得する事のみが既に改革家に取つて久しく且つ至難の懸案たりし爲と、又資本主義的經濟組織が其光輝燦爛たる明快なる半面のみを豫望せしめて、是に伴ふ陰鬱暗黑なる他の半面を指示する程に發達してはゐなかつた事に基くであらう。乍併、マルサスが個人の責任を重視し力說せる功は沒却するを得ない。蓋し如何なる社會に於ても、究極は個人道德と知識の向上を俟つて、始めて其幸福を實現し體驗し得可きものであるからである。唯彼れが之を以て不平等不公正なる經濟組織社會制度の恆久的擁護に曲用せる所に、甚大なる缺陷は存するのである。私は爰にマルサスの學說に關する紹介叙述の大要を終つた。續いて「人口論」批判の章に入り、彼れの時人幷に後人の論議を檢討しつゝ、結局それが現代に於て如何なる意義、如何なる價値を保持するかを究明せんと欲するものである。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（三）

奧井復太郎

九

愚を爲す者は、其の態度の如何に拘らず其の

愚に就いての酬を受けなければならない。

（Praeterita II, §.72）此の信條は又ラスキンの母が彼に加へた薫陶の原則であつた。彼女はスペンサア以前のスペンサア主義者であつた（E. T. Cook-The Life of Ruskin, vol. I, p. 9）從つて幼兒の愛に溺れる事なく寧ろ外部の人々にとつてはスパルタ式の嚴格さを感ぜしめた。

此の母の態度を語る一挿話は、屢々彼女の非難に用ひられるものであるが、一日幼いラスキンの我儘を通させて其の結果を子供に知らしめた熱湯を入れた藥鍋に就いての話である。保姆の腕の中で幼きラスキンは「自由」を主張する事によつて、自己の行動の價値を知らざる者が如何なる結果を招く可きやを知つた。子供の主張を諭す事の無意義なる場合、子供をして彼の行爲の結果を直接に知らしめたと云ふ母の態度は屢々非難せらるゝ所であるが Collingwood は此の態度を以て自己の子供を玩具として考へずに、信頼せらる可きものとして取扱ひ、經驗によつて自ら覺らしめんとするものであるとなしてゐる。（Collingwood,-Life and Work of Ruskin, vol. I, p. 16. Cf. E. T. Cook-The Life of Ruskin, vol. I, p. xo）

ラスキンの母が清教徒として強い信仰を有してゐる事は既に書いたが彼女は其の子供の將來を宗教的方面に入れるつもりであつた。（自叙傳第一卷第十九節）父親は此の母の見解に服してゐた（同第二十節、ラスキンは此の點で彼の父が重大問題の決定を母の意見に讓つてしまふ事を非難してゐる）それでラスキンは早くから教會へ連れて行かれた。然し日曜日は幼い彼にとつて可なりの嫌厭であつた。（註一）『日曜日の嫌厭は金曜日あたりから前以つて氣の鬱ぐ感を投げ掛けるのが常であつた。そして教會が七日間先へ行つてしまつたと云ふ月曜日の歡喜はそれに比すべくもなかつた』（Praeterita, I, § 21）然し彼が三歳の時赤いソファのクッションの上に昇つて『人々よ、正しかれ』（註二）と説教の眞似をした事は彼の母や其の親しい人々によつて賞讃せられた所であつたに違ひない。

更にラスキンの知識的方面に就いてみれば彼が極めて早熟の子供であつた事は直に窺ひ知れる。彼が外の子供が犬や馬の繪を描く樣に面白がつて印刷體の文字をうつした事や文章を讀むのに一言一句づゝ讀んで覺えて行くのを嫌つて全體の文章を一時に流暢に暗誦してしまひ、其れを反覆する内に各頁の凡べての言葉を正確に注意して行つた事などは自から自叙傳の内に書いてゐる（第一卷第一章、第十七、十八節參照）又彼が Walter Scott や Iliad（Pope の飜譯）を讀んでそれと彼が舊派の Tory となつた事を結びつけ、又日曜日には Robinson Crusoe や Pilgrim's Progress を讀んだ事、或は彼の母が毎日の課業に聖書の朗讀を課した事等は自叙傳第一卷の第一頁の邊に書かれてゐる。併しラスキンが何時頃から本を讀み始めたかは、正確な年代を彼自身記錄してゐない故に分明しないが Collingwood は滿四歳の時既に讀み書きを始めてゐたと書いてゐる、（Life and Work, vol. I, pp. 21-22）大體に於いて其がラスキン一家の Herne Hill（轉居した頃からである事は彼の自叙傳の Herne Hill の章に主として母親の此の方面の努力が載せられてゐるによつて察しうる。滿五歳の頃は最早一個の本むし（bookworm）であつたと Collingwood は述べてゐる（前掲書二二頁ラスキン自叙傳第一卷第十七節參照）

聖書の朗讀はラスキンが流暢に讀める樣になつて毎朝二、三章づゝ始められた（此の點に就いては自叙傳の第一卷第二章四十六節以下參照）勿論幼いラスキンにとつて其れは可なりの重荷であつたに違ひない。しかしラスキンは次の樣に書いてゐる。

『若しも難しい名前が出て來れば、よりよく發音の練習となつた。一章に倦きが來る樣であれ

ば其れは忍耐を養ふ教訓として一層よかつた。又不快な點があれば、其は斯くの如く赤裸々に述べられてゐるには何かその必要があつたのであらうと云ふ信仰を得る教訓として役立つた』（前掲書、第一卷第二章、第四十六節）

ラスキンの著書に現はれる聖書の該博なる知識は斯くの如くにして得られたのである。彼は又、別の所で同樣な意味の事を述べて

『辛棒強い、正確な、又斷乎とした此の訓練に就いて私が負ふ所は單に私が屢々其の役立ちを感ずる聖書の知識を得たのみならず、之れによつて大分刻苦する習慣を得又私の文學的趣味の最も善きものとなつたのである』（前掲書、第一章第二節）

更に此の聖書の朗讀の外には數句の詩の暗誦と「良い、佳調の、力强い詩」である美しい昔の Scottish paraphrase との課目があつた。後者に就いてラスキンは音に對する私の耳の最初の修養となつたものであると認めてゐる（前掲書第四十六節）加之ラテン文法は七歳の頃に加へられてゐた（六十四節）聖書に就いての母の與へた課業はラスキンの全教育中『最も貴重な且つ本質的の要素』となつたのである（前掲書四十八節）

註一、Cook 氏は氏のラスキンの評傳で『Hunter Street 及び Herne Hill の Evangelical な家庭に於ける日曜日はラスキンにとつて苦しい試練であつた』と書き Croydon も此の場合には逃げ場にはならなかつたとのべ（ラスキン傳第一卷一〇頁下より三行目）更に次の樣に書いてゐる。

"for his aunt, even more Evangelical than his mother, carried her religion down to the glacial circle of Holiness by allowing only cold mutton for Sunday's dinner,...." (Life, vol. I, pp. 10-11.)

併し茲に同氏が Croydon と云つたのは Perth の誤である。蓋し Croydon の叔母即ちジョン・ラスキンの母の妹、名前で云へば Bridget Cox (Mr Richardson of Market St. Croydon) の性格はラスキンの自叙傳から其の姉（即ちラスキンの母）の性格と對照して既に述べた所丈けでも Cook 氏の Croydon 云々の句を疑はしむるに充分である、然るに又ラスキン自身は自叙傳の中にも一人の伯母即ち Perth の伯母（ラスキンの父親の姉）に就いて此の羊の冷肉の事と彼の母よりも熱心な Evangelical である事とを書いてゐる。(Cf. Praeterita, I, §§ I. 4) 同氏の編纂になる Library edition 中 Præteria の同所に於いて別に Cook 氏の本文に就いての訂正又は注意書の無い所を見ると、同氏の Croydon 云々は明かに Perth 誤である事が分明するであらう。

註二、此の說教は Collingwood の評傳（並びに Frederic Harrison の評傳）には次の樣に書いてあつてラスキンが決して Evangelical ではなかつた事を示すものとされてゐる。

"People, be dood. If you are dood, Dod will love you. If you are not dood, Dod will not love you. People be dood!" (Collingwood-Life and Work, vol. I, p. 21. Harrison-John Ruskin, p. 11.)

一〇

Herne Hill の家庭は極めて靜穩な秩序正しくそして質素な家庭であつた。(Cf. M. Mather John Ruskin, p. 7. Praeterita, I, §§ 150-151. 48) 彼の母は聖書の朗讀や其他の午前中の課業に於いては極めて嚴格であつたが子供の力の及ばざる以上の難題を課する事なく是等の課業は大抵午前中に終つて午後の時間は全部彼のものであつた（自叙傳第一卷三十九節）Croydon との交渉は段々薄くなつて行つて（同十一節、四十一節參照）、友達を持たなかつたラスキンは全く獨居的生活を送つてゐた（同四十一節參照）そして既にのべた樣に天氣のいゝ午後は庭に出て『エデンの園の圍内に見される空や木の葉や小石』なぞに彼の想像力を結びつけ、「十九世紀の世界に實在する物象」を基礎としてロマンスの領域に飛躍する機會を得て居た（同、第二章四十一節）彼は彼が病的の好奇心からでなく讃歎的の驚異からあらゆる花をちぎつてみたり種子を集めてみたりした事を語つてゐるが又彼の植物學

上の知識の發展に就いては其の當時植物學の本は皆ラテンの文法書以上に難解であつたと述べてゐる(自叙傳第一卷第六十六、六十七節參照)又家にある時は積木の玩具や其の後手に入れた橋の玩具を持つて遊んだ事を誌してゐる。(是等の玩具がどの位ラスキンの建築の趣味に影響を及ぼしたに就いては彼自身この玩具のお蔭で彼が滿七八歳になる以前に既に『塔やアーチに於ける實際上の安定の法則』を全く心得てゐたと述べてゐる。—自叙傳第一卷六十五節參照)彼の父がロンドンの店から戻つて來て母と其の日の出來事や商賣上の事を語つたり相談したりした後で夏は暗くなる迄一同で庭に過した(前記の Wingate の所論は此の點を認めたものである)又彼の父は極めて流暢な朗讀家であつたので彼は妻の編物をしてゐる間に Shakespeare の喜劇史劇や Scott Don Quixote などを朗讀した勿論幼きラスキンも其の聽手の一人であつた(自叙傳第一卷四十五節、六十八節參照)朝の聖書の勉强に加へて此の夜の朗讀は比類なきラスキンの散文の秘密を吾人に與へるものである(Ada Earland, p. 26)。

斯の如きがラスキンの幼時を圍む家庭の有樣であつた。彼は是等を以つて「Heme Hill の健全なる喜樂」(四十六節)と云つてゐるが彼の生活の有樣に對しては「修道院的嚴格と貴族的威嚴」(一五一節)とか「ハーン・ヒルの隱庵的訓育」(一六三節)と云ふ樣な言葉を用ひてゐる。其して其の內に納つてゐた彼自身の姿に就いては彼の言葉が最もよく其の光景を描いてゐる。

『大體に於いて、私が滿七歳になる迄の內に、精神的には極めて獨立的となり兩親の考とすら違つてゐた。其して他に何等賴よるものが無いので非常に小さい、得々たる、滿足し切つた、自惚れた、Cock-Robin-Crusoe 流の生活を、幾何學的動物には、自然の事に相違ないが、私にも自分が此の宇宙に於いて其處を占めてゐるのだと思へた、その中心點に納り返つて營み始じめてゐたのであつた。』(Præterita, I, § 40)

茲に又彼に及ぼした家庭の影響の全部がある。彼自身此の影響を二つに分けて、幸福と不幸との二方面とし、幸福に屬するものとしては(一)思想、動作、及び言葉上の平和と云ふ事の意味を完全に敎へられた事、(二)服從と信仰の性質に就いて完全なる理解を得た事、(三)眼と精神の注意集中の習慣を得た事(註一)(四)味覺其他の肉體上の感覺を極めて完全になし得た事、等を擧げ更に不幸とも勘ふ可きものに就いては(一)愛す可きものが缺けてゐた事、(註二)(二)忍耐や彼の力量の試驗を受ける機會の無かつた事、(三)動作の適度、儀禮を缺いてゐた事、(四)彼自身の正邪の判斷、獨立的行動の力が容易に發達しなかつた事、等を擧げてゐる(四八節以下五三節迄參照)

ラスキンは此の幼時を追想して『後に可なり勤勉した爲めに、私の分析的能力を形成するに至つた辛棒强き觀察と、正確なる感情』以外には特殊の才能を現はした事なく『天才の本質的資質に關しては以上の點を除く外全く之れを缺いてゐて、』彼の『記憶は唯々平凡の能力に就いてゞあつた』(六〇節參照)(註三)

併し讀書や文を書く事に於いて早熟の才能を持つてゐたのは前に述べた通りであるが滿四歳の時彼の認めた手紙は正確であり又、自然的なものであるとして F. Harrison は寧ろ驚いてゐる(John Ruskin, p. 11. Collinwood—Life of John Ruskin. 1900, pp. 18-19 に載せられてゐる手紙がそれであつて其の引用は、Library edition,

vol. I, p. xxvi, note I に見出される）Collingwood は滿六歳にして彼が其の讀んでゐる本を眞似て自から本を書く事を企てたと述べてゐる、（Life and Work of Ruskin, vol. I, pp. 22-23）（註四）

併し此の方面の事柄は、彼の詩作と共に先づラスキンと旅行との關係を述べた後に語られるであらう、蓋し、『彼が文章を書き始めたのは、彼が自から見た所のもの、スケッチした所のものについてゞあつた（Library edition, vol. I. pp. xxv-xxvi）

註一、ラスキンが乏しい遊び道具や狹い世界の中に生活してゐた事から得た注意力の集中は後にかの Mazzini をして『歐羅巴に於ける、最も分析的な精神』を持つた人と嘆ぜしめた程である。（自敍傳、第一卷四九節）又彼が外國の建築や風景の美に就いて鋭敏な認識と深い感情とを持ち得た事は、五十碼と百碼の大きさの庭の、四面煉瓦塀に圍まれた內の幸福丈けに自からを狹ばめてゐた、良い習慣にその一部分はよるものである事を認めてゐる。（一五二節參照）彼の認識力に就いて、彼が自からを質のいゝ粘土に比較した事（Passage from the M. S. of Praeterita, Cf. Library edition, vol. xxv p. 618）や彼の一度得た認識の正しい事（Praeterita, I, § 119）等に就いては各項を參照せられたい。

註二、ラスキンが愛の對象を持たなかつたと云ふ事に就いては彼自身の言葉によれば彼の兩親は彼にとつて丁度太陽とか月とか云つたものと同樣に「自然の力が有形に現はれたものに過ぎなかつた」（又 Praeterita II, § 74 を參照せよ）又爭つたり援け合つたりする友達が無かつた事は既に述べた通りである。『是等の事の悪い結果は、恐くは私が我儘に、情愛の無い人間になつた樣に想像せらるゝかも知れないが、其れとは全く別で、情愛の起つた時に、前にその感情をどうしたらいゝものか經驗がないので、少くとも私には極めて、激烈な、手のつけ樣のない强さを以つて現はれて來たと云ふ事にあつた』（五〇節）

註三、Ada Earland は比較的にラスキンの幼時を悲觀的に觀てゐる、故に「不自然な程、自己抑制の習慣」の中に育てられたと考へる、（一八頁）而して幼時の生活全體の結論として次の如く云ふ、『かゝる孤獨、自制、早過ぎた刺戟等の習慣から當然の結果が生れた。ジョン・ラスキンは早熟な、自己中心的の、人前に出ては內氣な、物慣れぬ子供となつた。彼の健康も亦其の影響を受けて、花車な子供となり働かせ過ぎた頭腦は身體に作用して、爲めに八十一回の誕生日の間近まで生きてはゐたが、其の間彼の生涯中の種々なる危機は可なり重大なる疾患によつて誘ゐされてゐるし、又後年は、永い、段々と繼發する精神上の病氣の期間の爲めに全く蔓ちされてしまつた』（Ruskin and his circle, p. 23）

註四、Miss Edgeworth の Harry and Lucy に眞似て Joyce の Scientific Dialogue から材料を得てラスキンが本の形にして書いた Harry and Lucy Concluded being the Last Part of Early Lessons, in four volumes .... with copper plates, printed and coloured by a little boy and also drawn. を指すものであらう。（Cf. Praeterita, I § 61, 63.）年代は一八三六年から同二九年に及んだもので Cf. Collingwood Life and Work, vol. I, p. 23）更に是等の幼い企てがラスキンの後年の著作上に或る豫言的の暗示を以つてゐると云ふ見解に就いては Collingwood の前揭書に就いて見られよ。

二

前二項に於いて述べた所は寧ろラスキンが彼の母に負ふ方面であつた。併し乍ら彼が其の父との接觸は全く之れと別な方面に於いてゞある（Cf. Praeterita I, § 42）ラスキンの父が彼に及ぼした影響は美術的趣味の方面であつてラスキンは父の繪に對する見識を認めてゐる（Cf. Fors Clavigera Letter x）が主として此の關係はラスキン一家の屢々行つた旅行を中心としてゐる。

ラスキンの學問に就いては其後（一八三〇－三一年頃）London Chapel の牧師 Dr. Andrews 及び彼に推薦せられた Rowbotham を家庭教師として希臘語や數學、佛蘭西語を勉强した。が是等の人々は大なる影響を彼の上に加へる事がなかつた。（Ada Earland and F. Harrison 參照）Cook 氏はラスキンの教育中より重要なる部分は殊に兩親に伴はれた夏期の旅行であつたと述べてゐる（Life of Ruskin, vol. I, p. 18）夏期の旅行は大體に於いて、ジョン・ジェームズ・ラスキンが其の經營してゐる商會の注文を英國の各地方に取る傍、所々の風景や城砦、寺院や又貴族の邸宅などを訪れて、彼の美術上の趣味を滿

足させてゐたものである。此の旅行は彼の誕生日である五月十日過ぎに行はれるのが普通であつた。ラスキンは斯して幼い時から『英蘭や、ウエルスの凡べての街道と十字路や、蘇格蘭低地等の大部分』とを馬車の中から見て來たのである。（自叙傳、第一卷第五節、第二九－三五節を參照、旅行の年代又は場所に就いては E. T. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, p 19 又同書索引中の年表並びに、Collingwood—Life and Work of J. R. 前卷末尾の年表參照）

是等の旅行は父子の美術的趣味を涵養した點に於いて、ラスキンに對する彼の父の影響を認め得ると共に此の點に於いて兩者を尙ほ一層密接ならしめた機會である（Ada Earland—Ruskin and his Circle. pp. 24-25）又何れの傳記々者も均しく注意する所であるが是等の旅行が極めて多くの時日、餘裕と贅澤な準備を以つて行はれた事である、（Cf. E. T. Cook—The Life, vol. I, p. 19. A. Wingate—John Ruskin, p. 9.）然し茲に云ふ贅澤な準備と云ふのは決して普通云ふ豪奢と解せらるゝものではない寧ろ多くの日時を惜しげなく其の旅行の道中に費して充分に其の享樂を滿足せしめたと解せらる可きである、近代的高速度の交通機關による旅行はラスキン自身の最も非難する所である（Cf. Modern Painters, vol. III, chap. xvii, § 24 Præterita, I, § 123）而してかゝる古風な且つ贅澤な旅行はラスキンに二重の影響を與へたと考へる事が出來る。一は彼の持つてゐた自然に對する强き愛と尊敬で他の一は自然の忠實なる觀察者として彼が現はれた著作的方面である。

勿論ラスキン自身は第一の意味に於ける此の旅行の意義を重要視してゐない。彼は次の如く云つてゐる。

『是等の多くの尊敬に充ちた巡禮の中に、後になつて非常に役立つた美術や自然の風景に關する廣汎なる知識を熱心に集めはしたが私の性格、情愛、が彼等によつて殆ど變ぜられなかつた事は回想してみると私には明かである。而して私の個人的感情や生れつきの本能は永い以前から變らずに、Croydon の低い赤い屋根の下や、小砂がおどつたり柳鰷が Springs of Wandel の上にはね上つたりするミヅタガラシの生へてゐる小河の傍の、平和の中に謙讓な賤しい且つ純眞なる事物に結びつけられてゐたと云ふ事も私には明かである』（Præterita I, § 35 ラスキンの自然に對する愛に就いて Collingwood の見解は既に述べておいた）。

美術に對する彼の愛着は、併し乍ら、自然に對するそれよりも後の事である。ラスキンは自然に對する敬虔なる觀察を以つて彼の思想、教義の出發點となしてゐる（Cf. Eagle's Nest, § 41）。

『實に彼の若い時代は美しき風景とロマンティックな地とを求め尋ねてゐた一つの不斷の旅行であつた。彼の自然に對する愛は美術に對する愛よりもずつと早く發達してゐた。偉大なる伊太利の美術に對する彼の興味は誠に不思議にも後になつて、然も多少疑はしき方法で以つて現はれて來たのである、繪畫、彫刻、建築等の伊太利美術に就いての彼自身の理解を語るに最後迄で彼は、自然の美と其の神秘とを感じうる彼の力の矜と確信とを多少缺いてゐた』（F. Harrison—John Ruskin, p. 15）

（尙ほ此の點に關するラスキン自身の述懷に就いては、自叙傳第二卷第二、第三兩章に就いて一八四〇年の伊太利旅行に際して彼が其の美術に對して猶ほ充分なる理解を有せざりしを覺ひうると共に、一八四三年の「近世畫家論」執筆の當時の彼の古代繪畫に對する知識の缺除に關しては Library

edition vol. III, p. xxi を參照せられたし。又自敍傳第二卷第一〇一頁以下第一〇四節並びに同じく第一一三節以下第一一六節の間を參照、其處にラスキンは一八四四年並びに同四五年の頃に於ける彼の伊太利藝術に對する知識の發達を認めてゐる。）

併し此の旅行がラスキンの敍述的能力に大なる刺戟と修練とを與へたのは明白である。彼は熱心に是等の旅行の印象記を書いた、『彼が文章を書きはじめたのは、彼が自身見たり、スケッチしたりした事物に就いてゞあつた』（Collingwood は其の仕事を評して『恰も大英國の案内記か地名辭典にでもなる樣だ』と述べてゐる（Collingwood—Life and Work of J. R. vol. I, p. 20）從つて是等の旅行は幼いラスキンに自然の鋭い觀察者としての練習を與へその記述者としての力を養成したのみならず又彼が繪を描く事は實に是等の著作の挿畫にする爲めであつた（Ibid., p. 24）。

旅行の印象を書いたラスキンの幼時の作品には文學的價値は少ないが、彼が如何に驚く可き程鋭い自然の觀察者であつたか、又その思想を文字に現はすに如何に驚く可き才能を持つてゐたかを示してゐる（Cf. Ada Earland.—Ruskin and his circle, p. 26. F. Harrison—John Ruskin, chap. II. Collingwood の見解に就いては Library edition, vol. II. 二五三頁以下是等の詩に對する註釋を參照。觀察力の集中に就いてはラスキンの幼時の影響を前回にのべた。彼自身其の能力に對する見解に就いては、Præterita, I, § 119 並びに Passage frau the M, S, of Præterita, in Library edition, volume xxxv. p. 618 參照。）

Laureateship の希望が今や斯くして、彼の兩親が先きに懷いてゐた Bishopric の希望に附加ゐれた。（Ada Earland, ibid. ラスキンの幼時の作品は彼の父の極めて大なる歡喜であ。矜であつた。——此の父の態度に就いては Cook's Life of Ruskin, volume I, p. 27 seq. 參照）Cook 氏は此の時代の若きラスキンを評して既に『少年時代に於いて一個の著作家として描かれねばならぬ』と云つてゐる、（Ibid., p. 27）（ラスキン自身の回想に關しては、自敍傳第一卷、第四節、第一六二節參照）ラスキンの詩作に就いては又後に語る可き機會を見出すであらう（少年時代の詩は一八九一年 Collingwood によつて編纂された、ラスキン詩集第一卷「一八二六——一八三五年」の中に見出される、同時に讀者は彼が如何に多作家であつたかを見出すであらう。此の詩集の其の部分は Library edition, vol. II の第三編を爲してゐる、前に Collingwood の見解又は註釋と云へるは此の詩集に彼が編纂者として附したものである）。

Cook 氏はラスキンの此の作家的過勞から彼

"Harry and Lucy" Concluded. の事や其の中に載せられた六片の詩の事は既に簡單に書いた。是等のものが如何なる意義を有するやを知らんと欲するならば Cook 氏のラスキン傳第一卷二〇頁以下を參照せられたい。是等幼時の作品には後年の俤を忍ばせうる諸點がある、（例へば虹を歌つてその美に對する人々の無知を認めた詩の如き、Glenfarg の小谿を歌つて後年のラスキンの仕事であつた自然の風景の道德的寓意の序奏となつた一八二六年の詩の如き、鋭い分析的能力を示した「時」の詩の如き）又一八二八年の On Skiddaw and Derwent Water と云ふ一片の詩は二年後に雜誌に印刷されたラスキン第一の作品である。（Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 21-23. 是等幼年時代の詩に就いては Library edition, vol. II. 二五三頁以下を參照せよ。）

を救つたものとして繪を描く事と、彼の自然科學的研究の二つを擧げてゐる。（繪に練習並びにラスキンの才能に就いては、Præterita, I, §§ 82, 139, 85-87, 84, 239, 241,各節參照）ラスキンが自然科學的の觀察を好んだ事は彼の自敘傳中に屢々見出されるであらう。（Cf. Præterita, I, §§. 64, 67, 83, 106, 109, 111, 113, 119）ラスキン自から生涯の事業を回顧して

『Giotto を愛すると共に Galileo より學ぶ事を私に得せしめた、科學的能力と藝術家的感受性との均衡せる諧音』であると述べてゐる。（Fors Clavigera, Letter 67 quoted by E. T. Cook in "The Life of J. R." vol. I, p. 31）

『少年時代から彼は美術家であつた 併し幼兒から彼は地質學者であつた』と彼の父は語つた（Cook ibid., p. 32）F. Harison は既に掲げた Harry and Lucy に就いて『少年時代に正しき綴方、巧みなる書方、文學的表現、科學的興味、正確なる自然の觀察等を示す早熟性のかゝる歴然たる例證は稀れである』と述べてゐる（J. Ruskin, p. 10）（ラスキン自身の之れに關する興味ある言葉は自敘傳第一卷の六十三節に見出される。）

從つて『彼の少年時代の大望は彼の名前を美術批評の一體系と結びつける事でなくて、鑛物等の一體系に結びつける事にあつたのだ。彼の青年時代の夢は彼が英吉利人の師父になる事でなくて、Geological Society の總裁にならんとする事であつた。』（Cook－The Life of Ruskin, vol. I, p. 32. Cf. Præterita, I, § 109）

斯くて此の結果は、A. Wingate の言葉の如く、後のオクスフォードの學校生活其他に於ける彼の性格の一面を語るものとなる。

『科學的並びに藝術的氣質の混合した多くの人々の如くに、ラスキンも世界の各方面からの各種の印象を包含的に受入れた、彼は此の時代に、不愉快に思はるゝ事に藝術家が注意を集中させ樣とする時感ずる困難を同じく感じ乍ら、觀察力に於いてはあらゆる科學者的鋭さを持つてゐた』（Life of John Ruskin, p. 39）

併し結局ラスキンは普通の自然科學者ではあり得なかつた。例へば一八四二年の Chamouni への旅行は Mont Blanc の岩石に就いて徹底的觀察を企圖した地質學的計畫であつたが彼は單に岩石の構成や形狀を科學者的見地に於いて見る事に滿足してはゐなかつた故に Collingwood は云ふ。

『Chamouni に於いて彼は植物、岩石又は雲を研究した、併し其は是等によつて繪を描かんとする美術家としてゞはない、又同時に、是等を分類し又は分析せんとする科學者としてゞはない、彼は是等の事物の各相貌を學び更に其の生長と構成との精神に入り込むのである』（Life and Work of J. Ruskin, vol. I, p. 103）

故にラスキンは是等の外界の事物現象に精神的、道德的意義を附與して認めんとする者であるが然も彼の自然觀察の科學的正確と精密とは Sir Montagu Pollock をして「近世畫家論」より自由なる引用を爲さしめ、獨逸の批評家をして、野暮なる哲學的名辭の下にラスキンを英吉利に於ける「現象學」の大家と稱賛せしめた。（Cf. E. T. Cook－The Life of Ruskin, vol. I, p. 143 and its note 2）併し其は又後に於いて述べらる可き事に屬するのである。

二

旅行がラスキンに及ぼした影響に就いては上記のラスキンの見解を容認するとしても其は英國内地の旅行に就いてゞあつて大陸旅行の影響

とは別問題である。大陸への旅行は一八二五年に Paris, Brussel, Waterloo へ赴いた記錄を別としては、一八三三年のライン地方より瑞西への旅行を以つて其の發端とするを得る。前者に就いては餘り澤山語る必要を見ない（Cf. Præterita, I, §§ 119-120）併し後者に就いてはラスキンの生涯の運命を決定したものとして其の傳記中に特筆されなければならない。

一八三二年二月八日のラスキン第十三回の誕生日に（註一）ジョン・ジェームスの共同經營者である Henry Telford が彼に贈物として Turner の挿繪のある Rogers の著「伊太利」を贈つた（註二）ラスキンは此の挿繪に於いて、彼が懷いでゐる自然觀が Turner の製作に於けるそれと一致せる事を見出して非常に喜んだ。『彼が Turner の解說者としての生涯に於ける仕事は茲に定まつたのである』（Cook's The Life of Ruskin, vol. I, p. 34）（註三）一八三三年の春彼は Prout の Sketches in Flanders and Germany を求めた。其處に描かれた驚異の天地を僅に繪によつて父と共に眺め喜んでゐたラスキンは、母の一言によつて其を現實に見るの機會に接した。斯して一八三三年の意義ある大陸旅行は企てられた。（Cf. Præterita I, § 87 其の八十八節にはラスキンが未知の世界に對する强い憧れを以つて此の旅行の仕度をしてゐる事が語られてゐる。又此の旅行に就いては §§ 89, 90. Chap. IV. 參照）

註一、此の贈物の年代に就いてはラスキン自からその正確を疑つてゐる。彼は三二年であつたか又は三三年であつたかを疑問としてゐる、Cook 氏の評傳には三二年となつてゐる。Collingwood は其を十四回の誕生として三三年にしてゐる。（Life and Work, vol. I, pp. 44, 45, 46, 228）勿論何ずれにしてもラスキンの云ふ如く重大なる相違ではない。此の旅行の直接の動機となつたのは前記 Prout の Sketches は、一八三三年の四月に發行されてゐて、旅行は常に

一の如くジョン・ジェームスの誕生日五月十日を濟ませて其の翌日の十一日に始まつたのであるからして其の順序には何等變化を生じてはゐない。（唯遺憾なのは一九〇〇年發行 Collingwood の Life of Ruskin を筆者は持たぬ故に、Collingwood が筆者の引用する Life and Work（一八九二年序文）以後に如何なる訂正を試みたるやを明かにし難い事である。此の點は、筆者が本稿第一即ち本年一月號の本誌の拙稿に於いて Life and Work に就いて Collingwood の誤を E. T. Cook 氏によつて正してゐるが本當を云へば Collingwood の Life of Ruskin（1900）を參照して云々すべきを正當と考ふる故に茲に一言附記するのである。

註二、此の贈物がラスキンの Turner に對する尊敬を決定せしめ從つて又ラスキンの後生活を決定した要素となつた爲めに、其の贈主である Telford がラスキンの兩親によつてタアナア狂の原因として考へられてゐた。（Cf. Præterita I, § 28）

註三、併しラスキンは自から彼の思想が決して此の外的の一事件の爲めに決定せられたものでない事を主張して曰く『此の書物は私がタアナアの作品を充分に注意して眺める事の出來た最初の方便であつた、で私が私の生涯の努力の全傾向を此の贈物によらしめたとしても先づ多少の理由は無くもない。が性質に或る新方面を來さしめた出來事に、實際はかゝる出來事に重要性を認める性質が在るのである

がその性質の全事情の決定原因を求め樣とするのは思慮なき傳記々者の大なる錯誤である。要するに注意され又考へられなければならぬ要點は我がタアナアの作品を見た時に既に其を理解する事が出來たと云ふ事である……』Præterita I, § 28

一八三三年の旅行は Calais, Brussels を經て Cologne に赴き、ライン河を Strassburg 迄上り Black Forest を經て Schaffhausen に赴き Basle, Berne, Interlachen, Lucerne, Zurich 等を經て北瑞西を一巡し Constance へ出でライン河を Coire 迄上り Splugen を越へて Como, Milan, Genoa に出で、引き返して Simplon を越へ Geneva に至り Chamouni を見て Lyons, Dijon を經て戻つた大旅行であつた。ラスキンが『自然の解說者としての生涯の仕事』が決定したのは、此の Shaffhausen から始めてアルプスの連峯を望んだ瞬時に於いてゝある。（其の間の歡喜に就いては Præterita I, Chap. VI 參照、又同書第二卷第五

○節に於いては此のアルプス連峯の遠望を以つて、『創造に於ける仁慈なる意思の直接の示現』と稱してゐる。）

此の旅行の歡喜をラスキン自身の言葉に聽くならば次の如くである。

『其は私の持つてゐた乏しい僅か許りの力が全部極度に緊張してしまつた程私を興奮せしめた。私は確かに、同じ經驗を感じた事のない人には全く記述し難い性質の、又量で云へば此の三ケ月の間に、多くの人々が全生涯中に持ちうる以上に豐富な、熱情的幸福を得たのである』(Præterita, I, § 90).

此の旅行は彼の文學的才能を通じて其の結果を示してゐる。勿論彼は忠實に日記をつけてゐたが更に『之は彼の先づ始めて印刷された散文の一片と、詩並びに繪畫に於いて大望を懷いた計畫を起す機會であつた』John Claudius Loudon の經營した Magazine of Natural History にラスキンのライン河の水色、モン・ブランの地層に關する研究が載せられた（同誌、一八三四年九月、十二月號）是は勿論旅行の所產であつて一八三三年の末並びに其の翌年は、Rogers の Italy を眞似した詩の紀行文とその挿圖をかくのに忙しかつた。（九一節及一三九節參照）是等の詩のあるものは後に Friendship's Offering 誌に載せられた。（旅行の詩に就いてはラスキン全集 Library edition 第二卷第三編、一八三三—三四年の項 Account of a Tour on the Continent 參照）

同三三年にラスキンは大學に入り或は僧正職に就く爲めの準備としては Dr. Andrews や Rowbotham の教育丈けでは不向きなので Herne Hill に近い Grove Lane の Rev. Thomas Dale の經營する私學校に通ひ出した。（Cf. Præterita I, §§ 91, 92）そして既に述べた樣に間歇的に二年間此の學校に居た。ラスキンの正規の學校教育は極めて少なかつた、後一八三六年ロンドンの King College に同じく Dale 氏の英文學に關する講義を一週に三日聞きに行つた（Præterita I, § 205）此の點に關するハリソンの見解は當つてゐるであらう。

『自然の愛や又詩、散文の傑作に浸されてゐた、かくも早熟な、鋭感の子供は何等小學兒童的教育の指導を必要としなかつた。而して斯かる場合に通例ある如く彼が受けた小學校的教育は恐らく援助となるよりも寧ろ邪魔となつたであらう。』(p. 15)

Cook 氏も彼の初期の教育には彼をちやんとした學者に仕上げる樣な何ものも無かつたと述べてゐる（Library edition, vol. I, p. xxii）而して不斷の旅行と彼の觀察せる所のものゝ倦まざる記述とを具へた、かゝる散漫なる教育は、ハリソンの言葉に從へば『自然と美術のエヴァンヂェリストや熟達せる文體の大家を生み出すのには理想的な方法であつたが又一方には、彼が堅實なる思想家、近代社會の合理的改造家たらんとする事を不可能ならしめたのであつた』(Harrison, p. 18)

其は兎に角ラスキンは一八三五年肋膜炎を病つて Dale 氏の學校をやめた。そして健康になり次第瑞西へ旅行する約束が出來ラスキンは喜びの中に其の仕度をした（Præterita I, § 76）

『私は空の青色をはかる爲めに青度計をコバルトで塗してつくり、地質學上の觀察の爲めに罫のあるノートブックや又建築のスケッチの爲めに角罫と思ひ附きにも側に一呎尺のついてゐる大きな四折判紙とを求めた。更に此の旅行の出來事や印象を、Don Juan のスタイルに Childe Harold のそれを巧みに合せて、詩文日記に書き表はさうと決めた』

此の旅行の最初の部分に關しては自叙傳第一卷第九章に語られてゐる。此の時の道順は佛蘭

西を經て Geneva, Chamouni, に行き Great St. Bernard, Swiss Oberland を訪れ Innsbruck に進み Stelvio を越えて Venice に入り Salzbury, Carisruhe, Strassburg, Parisを經て戻つた。(Cook's The Life of Ruskin, vol. I p. 42) Cook 氏は茲にラスキンが『健全なる勞働を喜悅』とに入る入口を見出した事 (Præterita I, § 180) を認めて『彼が彼の王國の別の方面に入つた機會』があるとしてゐる (Cook's op. cit., p. 41 詳しくは Præterita I, § 194 に就いて參照せられたい。)

又旅行の結晶は殆ど彼の地質學的又は他の科學的觀察を含んだ散文日記と其の挿繪とに現はれた。是等の中から Loudon の Magazine of Natural History への原稿が提供された。(Library edition, vol. I, Introduction. pp. xxx-xxxi 又此の旅行の詩及び韻文體の手紙其他の記錄に關しては Ibid, vol. II, pp. 395-448 「第二編一八三五年」參照—Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 42-45. 畫作に關しては Præterita I, § 239 又 A. Wingate op. cit., p. 19 參照。此のラスキンの地質學的觀察に富んだ日記は動もすると畫けるが如き華麗なる記述に轉じ去らんとしてゐる、Library editio, vol. I, p. xxxi)

『一八三二年 Rogers の Italy の贈物と、一八三六年 Domecq 家の娘達が Herne Hill を訪れた時とに亘る期間はラスキンの生涯中最も幸福な時であつた』と Earland はラスキン傳の第一章の終に書いてゐる。一八三六年はラスキンにとつて意義に富める年であつた。其は彼の初戀の記錄あると共に、新生活に入る第一歩が決定された年であつた。

三

ラスキンが一八三二年に Rogers の "Italy" を始めて見て Turner の挿繪に歡びを見出したのは彼こそは眞に『山嶽の眞理』を描き得た畫家であつたからである。(Cf. Præterita II, § 12)

一八三六年に此の畫家は "Juliet and her Nurse." "Rome from Mount Aventine." "Mercury and Argus." の三點の作品を展覽した。然るに上に掲げられた第一の作品に就いて Blackwood Magazine 誌上の一文が Turner に非難を加へた。此の批評は若きラスキンを極度に怒らせた彼自身次の如く云ふ。

『此の評論は私を眞赤になる程怒らせた……そこで此の時にはもう文章を書く自分の力にも又タアナアの作品の魅力に就いても——又單に判斷力のみならず眞實の經驗を持つてゐたので——相當の自信を持つてゐたので、Blackwood に反駁を書いた……然し私の父は其の公にするに先立つてタアナアの許可を得るのが正しいと考へて、そこで私は一生懸命に上手に寫して Queen Anne Street に送つた。此の老人は親切にも次の樣な返事を吳れた……』(Præterita, I, § 243)

Turner の返事はラスキンの好意と努力を感謝した後で「此の樣な事柄には係はらない」旨を述べ更にラスキンの書いた原稿を問題の繪の所有者 (Mr. Munro of Novar) に送附して差支なきや否やを聞きあはせてゐる (此の手紙の日附は同年十月六日) 此の稍冷やかなる態度は Collingwood によつて次の樣に解せられてゐる。

『Turner は此の若き戰士を靜める事に於いて全く正しかつた。其の論文は滿十七歲の少年にしては極めて賢明であつたには違ひないが、當然未熟な所があり、徒にジョン・ラスキンが未だ慣れてゐない、討論を引き延すの外に何等效果を上げ得なかつたであらう。而して、又然る時は、Modern Painters の代りに吾々は、直に忘

れられてしまふ評論雜誌の頁の上に、即意當妙の返答の、不滿足な數行を持ち得たに過ぎなかつたであらう』と(Collingwood—Life and Work, vol. I, p. 68. E. T. Cook氏も之の時からModern Painters の著述に到る迄での期間はラスキンの力を用意するのに役立つたものであるとしてゐる。Cf. Library edition, vol. III, p. xix) 更にCollinwood は Turner が此の若き戰士に對して溫かい態度を實際執つたならば其の結果如何と云ふに就いて、或はラスキンの將來の誤を救ひ得たかも知れないが又彼のより大なる個性は失はれて『一人の Turner、一人の Ruskin の代りに吾々は唯々一人の Turner とそして彼の傳記々者とを持つ』に止まつたであらうと述べてゐる (Ibid.)

併し此の一篇は明かにラスキン自身も認めてゐる如くに、『Modern Painters の第一章』である°(Præterita, I, § 243. E. T. Cook氏は Library edition の Modern Painters, vol. I の緒言に於いて「オクスフォード卒業生」の匿名の下に書かれた此の傑作の眞髓となれる一論文はオクスフォード入學許可の一週間前に書かれたとして、此の理由から此の一篇を同卷の末尾に附してゐる「Library edition vol. III, p. xviii」) ハリソンは『其の熱誠に於いて、其の自然の愛に於いて、又其の充溢せる點に於いて、其は全く立派な Ruskinian であり又誠に Modern Painters の序文である』と考へる(J. Ruskin, p. 26) (Blackwood Magazine 誌の非難、ラスキンの其れに對する反駁の梗概又 Modern Painters との連絡に就いて詳しくは、E. T. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 49-51 參照)

此の出來事の數週後に(同年十月)ラスキンは gentleman-commoner としてオクスフォード大學への入學が許可せられ Christ Church へ學籍を置く事となつた。(gentleman-commoner の事、及びオクスフォード入學の事情に關しては Præterita, I, §§ 211-213 參照) 一八三七年正月彼は母と共にオクスフォードに至り其の翌日の夕方彼は『Peckwater の彼の College room に於いて、彼自からの生活を獨りで營んで行かうとする自分の姿を其の爐邊に見出した』(Præterita I, § 214) 彼は其の爐邊に於いて來る可き新しい生活に對する彼の力を靜かに考へてゐた、そして唯彼の心配になつたのは彼が『向後三年間少しも興味を持つてゐない仕事に與はつて行く力』の有無に就いてゞあつた。併し彼は兩親並びに自己の爲めに出來る限りの努力を爲す決心をつけて、眞面目に祈禱を濟ませた後、よき希望を懷き乍ら寢床に入つた。(op. cit., § 215)

ラスキンのオクスフォード生活を語る前に今一つ此の年の出來事に就いて語らねばならない。其はジョン・ジェームスの共同經營者であつた Peter Domecq の娘 Adèle Clotilde Domecq に對する初戀の物語である。

既に一八三三年の大陸旅行に際してラスキンは其の歸途巴里に寄りて Domecq 家を訪れてゐた。其して此の訪問は彼にとつて極めて宿命的のものであつた (Cf Præterita, I, §§ 94, 201) 一八三六年一月から二月に掛けて Domecq 家の華かにして美しい四人の娘達が英吉利を訪れて Herne Hill のラスキン邸へ滯在してゐた。ラスキンは後年此の事を自叙傳の中に次の樣に書いてゐる。

『想像もつかない星を集めた、最も珍しい銀河か或は南方の十字星宿が突然にロンドンの郊外の私達の薄暗い空に飛んで來た …

『私は無藝無智で手も足も縛ばられたまゝ是

等の四人の娘達の、眞赤に燃へてゐる爐の中或は十字火（fiery cross）の中に放り込まれた――勿論是等の娘達は私を四日間の中に燃やしつくしてしまつてたゞ眞白な灰の塊にしてしまつた』（Præterita, I, §§ 205, 206）

ラスキンの Adèle に對する感情は極めて强いものがあつたに相違ない。が彼が此の方面の事にかけては又極めて不得手であつた事も容易に想像せられる所である（Cf. Collingwood, op. cit., vol. I, p. 56）彼は其の感情を――當然想像せらるゝが如く――詩や物語に書き現はして彼女に訴へた。（註一）併し彼女は其等を一笑に附して取り合はなかつた。（註二）1850 年にラスキンの父の手に編纂された詩集には、On Adèle, by Moonlight, Good Night,（以上一八三六年ラスキンの滿十六歳）The Last Smile（一八三六年二月初旬以降の作、即ラスキン十七歳）The Mirror,-Remembrance（以上一八三七年、ラスキンの十八歳の作）等が擇ばれてゐる。（其の他の戀愛詩に就いては Library edition, vol. II, p. 449 以下參照）ラスキンの當時の感情は是等の詩によつて充分に窺ふ事が出來るのである。

註一、ラスキンの Adèle に對する Literary recommendation の一つとして伊太利の物語 "Bandit Leoni" がある。此のラスキンの作は Friendship's Offering 誌に寄稿せられた。昨年『ラスキンの經濟的美術觀』を公にせられた御木本隆三氏は其の〇六頁に之れに關するラスキンの自敍傳中の記錄を引用しておられるが其の中に一つの誤がある「私は先きにナポリやバンディット、レガニなどの物語りを一生懸命に綴り合せて『友情を求む』Friendship Offering と題してアデールに見せたが彼女は唯感興なく一笑に附して仕舞つた。……」

之れに對するラスキンの原文を全部引用するのは面倒であるし又御木本氏の引用も抄譯に近いからして其の必要を見ない。唯、右記の Friendship Offering ――正しく書けば Friendship's Offering ――は上記のラスキンの作を綴り合せたものに下した題名ではなく、當時 W. H. Harrison によつて編纂されてゐた雜誌の名である。御木本氏引用の原文の中には（Præterita, I, § 207）『Messrs. Smith & Elder と私達との關係が此の物語を Friendship's Offering 誌上に載せて貰ふ事を得せしめた』とある。同誌は Thomas Pringle の編輯の下に一八二四年に發刊され一八二八年から一八四二年迄は上記の出版所から發行されてゐた年一回の流行雜誌である。上に云ふ『私達の關係』と云ふのはラスキンのクロイドンの從兄 Charles Richardson が同所の書記であつた事を指す。此の關係でラスキンは一八三三年頃 T. Pringle と知り合ひになり（Præterita, I, § 103）同誌に寄稿してゐたのである。W. H. Harrison は Pringle のあとを承けて一八三七年から四一年迄で同誌を編輯してゐた者で（Cf. Præterita II, § 5）"Bandit Leoni" は一八三七年の同誌に載せられたものである。尙ほ詳しくは Library edition, vol. I, pp. xlvi-xlviii を參照せよ。

註二、Adèle のラスキンに對する態度に就いての傳記々者の觀察は Collingwood-The Life and Work, vol. I, p. 56. 殊に Ada Earland-Ruskin and his circle, p. 35. を參照せよ。

此の事件に對する親達の立場は各々異つてゐた。ジョン・ジュームスは Domecq 家との交渉に就いて異議のないのは勿論であつたらうが更にラスキンの戀詩や上記の作が Friendship's Offering へ寄稿せらるゝのを歡んでゐたし、P. Domecq は彼の商賣上の關係と合せて此の有爲の青年が自分の四人の娘の中一人の婿となる事は歡迎してゐた。たゞラスキンの母のみが宗教上の相違から此の交渉を恐れて Domecq の人々が一日も早く巴里に歸國して再びラスキンの眼前に現はれない事を希望してゐた（Præterita, I, § 308）然るに此の母が一八三八年になつて當時英國に來てゐた此の娘達を訪れた場合に、ラスキンを同伴し、然も Herne Hill の家へ招待した事は當のラスキンと共に彼の傳記々者が不審に思ふ所である。（Præterita, I, § 254. Ada Earland, op. cit., pp. 36, 42.）此の再度の會合に於いてラスキンの Adèle に對する情愛は更に又强く起つたに違ひない。蓋し一八三六年の終りにオクスフォードの入學が定まつて一八三七年から彼には新しい生活がひらかれたのであ

る、Ada Earland は『困難な仕事と、健全な興味とを有する生活の中に新しい交友、新しい目的や野心等が戀を後方へ追ひやつてしまつた』(p. 41) と書いてゐる。斯く考へれば一八三八年のラスキンの母の不可解な行爲は結局ラスキンを一八四〇年の絶望に導びいたものと考へる事が出來る。さればこそ又ラスキンが兩親の希望してゐた僧正職にその將來を見出す事なくして prophet とし吾々の前に現はれ得たとも云へる。(Cf. Præterita I, § 255) 一些事が運命を決する重大動機であるとも云へようが其の點は人各々の判斷に委ねる。

ラスキンの戀愛は彼の文才を通じて現はれた。此の時代は一八三五年と相ならんで詩に於いて多作な時であつた。併し詩の事は後の機會に讓つて玆では彼のオクスフォード生活を語らう。

フイリップスの貸出金の公式

鈴木良雄

此一文は C. A. Phillips 氏著 Bank Credit, the Macmilian Company. New York. 1921. 中の一章「銀行信用の原理」(the philosophy of Bank Credit. pp. 32-76) に於て述べられたる貸出金の公式に關する部分の大要を抄錄したものである。

本論を草する主眼は一銀行の信用擴張と一銀行組織の全體より見たるそれとの間に確然たる差別を立てるにある。多くの銀行論者は此點を觀過し漫然と貸出を論じ一般より見たる原則を個々の銀行に當嵌めたる結果大なる誤謬を生じた。即ち一定地域内に於ける銀行全體は其保有する準備金の數倍に亘る貸出をなして居る而して一般的眞理は各個に就て見るも眞理にして如何なる銀行の貸借對照表を見るも其準備金の數倍に昇る貸出高を有す從つて論者は屢々一銀行の準備金に對し一定額の現金(註一)を附加するときは其銀行をして數倍の貸出能力を得せしむるものである。之を例せば甲銀行が十萬弗の準備金を保留して百萬弗の貸出高を有するとき新たに現金十萬弗を得れば更に貸出をして百萬弗增加することを得せしむるものであると。(註二)

註一、本論に於て用ふる現金なる語は廣義にして小切手、手形等と區別せず。蓋し銀行は合法上の貨幣を得ると手形の如き直ちに法貨と交換し得るものを收受すると何等區別するの必要なきが故である。

註二、E. E. Agger: Organized Banking. pp. 31-33. H. G. Moulton: Surplus in Commercial Banking, Journal of Political Economy vol. XXV. W. A. Knifin: The practical Work of a Bank. pp. 14-16.

後に詳論するが如く此所論は貸出金增加の現象に對する說明としては當を得たるものに非ず。只支持せられ得べき論點は一銀行組織中に於ては斯る狀態を呈すといふに止まるものにして一個の銀行が一定額の純預金 (primary deposit)(註)を增加したる場合にはこれより僅か多額の貸出をなし得るに過ぎず。然るに一銀行に於ては數倍はさて措き二倍の貸出能力をも有せざる現金の一定額が銀行組織中に於ては如何にして其數倍の貸出となり預金となり得るか先づ舊來の學說を一瞥することゝする。

註、純預金とは派生的預金又は貸出振替預金 (deriviative deposit) と對立せらるべきものにして前者は現金又は容易に現金と交換し得る他店宛小切手手形等を以てする預金にして將來貸出金に充當する豫定なきものを云ひ後者は貸出金の振替又は貸出金支拂の用に充つる目的を以て受入れたる預金を指す本章に於て貸出預金なる語は皆此意義に用ひたり。

マクレオド (H. D. Macleod) の所說を殆んど逐語的に襲用したるホワイト (Horace White) は其著書「通貨と銀行」の何れの版に於ても根本に於て相等しき說明を試みて居る次に拔萃せるは誤れる學說の一典型である。